

## 肺癌患者における咳関連QOLの検討

櫻井章吾<sup>1)</sup>、林 一郎<sup>1)</sup>、望月栄佑<sup>1)</sup>、野口理絵<sup>1)</sup>、三枝美香<sup>1)</sup>、山本輝人<sup>1)</sup>、宍戸雄一郎<sup>1)</sup>、  
秋田剛史<sup>1)</sup>、森田 悟<sup>1)</sup>、朝田和博<sup>1)</sup>、藤井雅人<sup>1)</sup>、白井敏博<sup>1)</sup>、須田隆文<sup>2)</sup>  
静岡県立総合病院 呼吸器内科<sup>1)</sup>、浜松医科大学 第二内科<sup>2)</sup>

【背景と目的】 咳嗽は肺癌の主要症候であるが、QOLにおよぼす影響は明らかでない。今回、初発時の肺癌患者の咳関連QOLについて検討した。

【対象と方法】 2012年7月～2013年2月に気管支内視鏡検査により肺癌と診断された98例にLeicester Cough Questionnaire (LCQ)日本語版(新実・小川訳)を実施した。

【結果】 男性68例、女性30例、年齢中央値70(38～85)歳。喫煙歴は67例が有した。組織型は腺癌/扁平上皮癌/小細胞癌/大細胞癌/その他=40/18/12/3/25。臨床病期は I/II/III/IV=30/7/17/25。24例が気管支内視鏡で内腔に病変を認めた。LCQは7～21点(平均17.9点)、21点満点は7例で、内腔病変を有する例、Stage IVで低下していた。単変量解析では、咳関連QOLの高度低下群(18点未満)は扁平上皮癌または小細胞癌が主体で腫瘍径が大きく、内腔病変を有し、進行癌が多かった。多変量ロジスティック解析では、咳関連QOL低下に寄与する因子は内腔病変の存在であることが判明した。追跡可能であった30例(手術/化学療法=13例/17例)の治療開始6ヶ月後の平均LCQは、治療前/治療後=17.88/18.99と有意に改善していた。

【結語】 内腔病変を有する肺癌患者では咳関連QOLが低下していることが明らかとなった。